

ある蔵書の運命

——『マルクスとエンゲルスの蔵書の
なかのロシアの本』——

佐藤金三郎^{*}

マルクス、エンゲルスが生涯をつうじてロシアに強い関心を抱いていたこと、ふたりともロシア語を知っていて、ロシアの文献を原語で読んでいたことは、すでによく知られている。では、彼らはロシアの本をどのくらいもっていたのであろうか。また、それらの本は現在どうなっているのであろうか。これは、たんにマルクス、エンゲルスのロシア論の研究者にとっただけではなく、一般の読書人にとっても興味ある問題といってよいであろう。

ところが、最近、これらの問題を解決するうえで有力な手がかりを与える書物が現われた。モスクワのマルクス＝レーニン主義研究所（以下、ML研(M)と略称）の編集で出版された『マルクスとエンゲルスの蔵書のなかのロシアの本』¹⁾が、それである。この書物は、ある意味で、1967年にベルリンのマルクス＝レーニン主義研究所（ML研(B)と略称）の編集で出版された『マルクスとエンゲルスの蔵書から』²⁾のつづきである。この『蔵書から』には、かつてのマルクスとエンゲルスの蔵書のなかで第二次大戦後に東ドイツその他で再発見された504点（約700冊）の著作の目録が記載されていた。この目録はたしかに貴重なものではあるが、しかし同様に再発見されていたロシア語の著作約80冊のカタログを含んでいないかぎりでは、不完全なものであった。『蔵書から』のなかの予告によれば、それは別にML研(M)によって、ひきつづいて出版されることになっていた。だから、この

* さとう きんざぶろう 横浜国立大学

1) Ин-т марксизма-ленинизма при ЦК КПСС., *Русские книги в библиотеках К. Маркса и Ф. Энгельса*, Москва, Политиздат, 1979.

2) Inst. für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, *Ex Libris Karl Marx und Friedrich Engels. Schicksal und Verzeichnis einer Bibliothek*, Berlin, Dietz Verlag 1967. 本書には、杉原四郎氏、鈴木鴻一郎氏による紹介がある。杉原四郎『マルクス・エンゲルス文献抄』未来社、昭和47年、198-212ページ。

鈴木鴻一郎『資本論偏歴』日本評論社、昭和46年、208-217ページ。

予告は昨年出版された『ロシアの本』によって12年後にようやく実現された、というわけである。しかし、この出版の遅れは決してむだではなかった、といつてよいであろう。というのは、そのおかげで、『ロシアの本』は『蔵書から』のたんなるつづきである以上のものとなることができたからである。以下、その間の事情を、主として本書によりながら、簡単に述べてみよう。

東ドイツで再発見された前記の約80冊のロシアの本は、1950-57年に ML 研 (M) に寄贈された。内訳は、マルクス、エンゲルスの書き込みのあるものが46冊であり、書き込みのないもの、原著者のマルクス、エンゲルスへの献辞のあるものが33冊であった。これらの本は『蔵書から』に記された再発見の経緯からみて、あきらかに1933年春にナチスによって押収されたベルリンのドイツ社会民主党 (SPD) 文庫に属するものであった。よく知られているように、この党文庫は、1895年にエンゲルスが死んだのち、彼の遺言によって贈られたマルクスとエンゲルスの蔵書をもっていたが、その目録は存在しなかった。こえて1927年に、モスクワのマルクス=エンゲルス研究所 (ML 研 (M) の前身) は、所長のデ・ベ・リャザーノフのイニシヤティヴによって、SPD 文庫の蔵書をはじめ系統的に調査した。その結果、1130点 (1414冊) から成るマルクスとエンゲルスの蔵書カタログが作成され、同時に、それらのうちマルクス、エンゲルスの書き込みを多く含んでいる 131 冊の書物のフォトコピーがつくられた。また、マルクスとエンゲルスの蔵書のなかのロシア語の著書、パンフレット、抜刷、定期刊物物など、合計 209冊の目録が作成された。この目録とさきの蔵書カタログとの関係はかならずしも明らかではないが、しかし目録の作成にメンシエヴィキで当時マルクス=エンゲルス研究所のベルリン通信員のペ・イ・ニコラエフスキーが重要な役割を演じたことだけは確かである³⁾。

ところで、『ロシアの本』によると、ML 研 (M) がこの書物の刊行準備の作業を始めたのは1973年であったが、最初はただ当時までにモスクワに集められていた約100冊のロシアの本の目録を作成することだけが計画されていたようである。しかし、この計画は作業の過程で変更され、未発見の本の探索をさらにつづけることが決定された。

探索されなければならない場所は、まず第一にベルリンとアムステルダムであった。前記の約80冊のロシアの本は ML 研 (B) や、そのほかの東ドイツの図書館から再発見されたものであった。それらの場所が再び調査されることになった。そ

3) ニコラエフスキーは、このときの調査結果を次の論文に発表した。Б. И. Николаевский, Русские книги в библиотеках К. Маркса и Ф. Энгельса, 《Архив К. Маркса и Ф. Энгельса》. кн. IV. М.-Л., 1929, стр. 355-423.

れに、アムステルダム の社会史国際研究所 (IISG)。この研究所が現在 SPD にかつて属していたマルクス=エンゲルス遺稿を所蔵していることは、すでによく知られている。IISG はこの遺稿を1938年に SPD から買い取ったのであるが、このとき購入されたもののなかに、マルクス、エンゲルスの蔵書のなかの書物が、何十冊が含まれていたのである。それらの書物は1933年に SPD 文庫の蔵書がナチスによって押収される直前に、かろうじてベルリンから救い出されたものであった。なかでも前記のニコラエフスキーによってパリへ運ばれた分は、大部分がロシアの本であった、といわれている。

しかし、IISG が現在所蔵しているマルクス、エンゲルスの蔵書のなかのロシアの本は、たんにかつての SPD 文庫に属するものだけではなく。1973年に、IISG の所員 H.-P. ハースティックがマルクスの蔵書の運命に関する論文⁴⁾を発表した。この論文によって、IISG は1884年春にエンゲルスによって当時パリに住んでいた「ロシアの革命的亡命者の承認された代表者」ペ・エリ・ラヴロフに贈られたマルクスの蔵書のなかのロシアの本をも所蔵していることが明らかになったのである。エンゲルスによって SPD に贈られたマルクス、エンゲルスの蔵書にくらべると、ラヴロフに贈られたマルクスの蔵書の運命については、最近までほとんど知られていなかった、といわれている。それだけに、ハースティックの論文は貴重であった。ML 研 (M) が『ロシアの本』の準備過程で当初の計画を変更したのも、その理由のひとつはおそらくこの論文の出現によるものであろう。

ラヴロフに贈られたマルクスの蔵書のなかのロシアの本はエンゲルスによると約100冊であるが、その詳細は不明である。これらの本を含むラヴロフの蔵書は1900年に彼が死んだのちに二分され、一部はパリにあったトゥルゲーネフ・ロシア図書館に移された。他の部分はラヴロフ文庫として知られ、それは1902年に社会革命党 (エスエル) が結成されたのちが党文庫としての地位を占めるようになった。その後、この文庫は拡大をつづけ、エム・エル・ゴーツやイェ・イェ・ラザレフの蔵書をも併せて「ラヴロフ=ゴーツ・ロシア文庫。パリ」の名前で呼ばれるようになった。それは20年代のはじめにブラハへ移されたが、1936年に IISG がこの文庫をエスエル党から買い取るための交渉をはじめたときには、蔵書数はすでに1万冊をはるかに超えていた⁵⁾。ミュンヘン協定ののち、1938年12月に「ラヴロフ=ゴーツ文庫」は保管の安全のためブラハからアムステルダムへ移され、翌39年3月

4) Hans-Peter Harstick, „Zum Schicksal der Marxschen Privatbibliothek“, *International Review of Social History* Vol. XVIII-1973-part 2, pp. 202-222.

5) 1975—76年に IISG で発見された「ラヴロフ=ゴーツ文庫」の古いカタログによれば、蔵書数は12893冊であった (*Русские книги.... стр. 263.*)。

1日にはついに IISG に売却された。もちろん、このとき IISG が獲得した文庫のなかには、1884年にラヴローフが受け取ったマルクスの蔵書が含まれていたのである。だから、かつてエンゲルスによってラヴローフと SPD とに二分されたマルクスの蔵書のなかのロシアの本は、その全部ではないにせよ、約半世紀ののちに IISG で再びひとつになった、というわけである。

マルクス、エンゲルスの蔵書を含む IISG 所蔵の書物が第二次大戦中にこうむった苦難の歴史については、すでに P・マイヤーの有名な論文⁶⁾によってよく知られている。当時16万冊を超えていた IISG の蔵書はドイツ軍のオランダ占領とともにナチスによって没収され、1944年末にドイツへ持ち去られた。それは戦後の46年春によくやくヴィンデルハイムのヴェーザー川に浮かぶ二隻のはしけのなかで発見され、再びアムステルダムへ返されたが、しかし約5パーセントの書物は永遠に失われた、といわれている。このとき失われた書物のなかには、マルクス、エンゲルスの蔵書も含まれていた。

戦後、IISG の蔵書はいちじるしく増大し、現在ではすでに50万冊にも達している。他方、エンゲルスによってラヴローフに贈られた本の目録も、IISG が SPD から買い取った本の明細も存在しなかった。マルクス、エンゲルスの蔵書はいわば50万冊の書物の大海のなかで没してしまっただけなのである。だから、ML 研 (M) が IISG やそのほかの場所でマルクス、エンゲルスの蔵書のなかのロシアの本の探索を行なうためには、あらかじめそれのできるだけ完全な目録を再構成して全貌を明らかにしておく必要があったのである。この目録を作成するために、次のような資料が利用された。マルクス、エンゲルスがロシアの本を読んだときにつくった抜粋やメモ、マルクスとエンゲルスとの、また彼らと第三者との往復書簡、マルクス、エンゲルスの友人や同時代人たちの回想や彼らの往復書簡、マルクス、エンゲルスの書き込みや彼らあての献辞を含むロシアの本、1920年代に SPD 文庫でつくられたマルクス、エンゲルスの蔵書目録、最後に、1882年にマルクス自身によって作成されたリスト「私の書架のなかのロシアの本 *Russisches in my bookstall*」。これらの資料のなかでとりわけ貴重な最後のリストは1975年に初めて公表されたが、『ロシアの本』にも、第1部に、その写真複製、原文、ロシア語訳が再録されている。それには115点(150冊以上)の本が記載されているが、しかしそれは、かならずしもマルクスの蔵書のなかにあったロシアの本の全部を網羅したものではないであろう。多分、このリストは、それが作成されたときにマルクスの手もとに存在

6) Paul Mayer, „Die Geschichte des sozialdemokratischen Parteiarchivs und das Schicksal des Marx-Engels-Nachlasses“, *Archiv für Sozialgeschichte*, VI/VII. Band-1966/1967, Hannover, 1967, SS. 5-198.

していたものだけが記載された、と推定されている。

『ロシアの本』の第2部には、こうして再構成されたマルクスとエンゲルスの蔵書のなかのロシア語の著書、パンフレット、檄文、定期刊行物など、合計364点(526冊)の目録が解説つきで記載されている。これは現在望みうる最も完全な目録であり、これによって、われわれははじめてマルクス、エンゲルスの蔵書のなかのロシアの本の全貌と、彼らによるこれらの本の研究および彼らの著書のなかでの利用の程度と性格とを知ることができるようになったのである。それだけではない。この目録はまた、アムステルダムやベルリンその他の場所での未発見のロシアの本の探索を可能にし、促進したのである。

この探索は1975-77年に ML 研 (M) によって行なわれた。その結果、あらたに IISG で73冊、ML 研 (B) で81冊、計154冊が発見された。それらのうち、マルクス、エンゲルスの書き込みのあるものは、前者が25冊、後者が5冊、計30冊であった。そのほかに、ML 研 (M) でも、前記のマルクス作成のリスト中の1冊が発見された。ML 研 (M) には、それまでにすでに約100冊が集められていたのであるから、マルクス、エンゲルスの蔵書のなかのロシアの本は、結局、現在までに約255冊が再発見された、というわけである。『ロシアの本』の目録に挙げられている526冊のうち約 $\frac{1}{2}$ である。また、ラヴローフのもとに約100冊、SPD 文庫に209冊所蔵されていたといわれているから、それらの合計約309冊のうち約 $\frac{1}{2}$ である。マルクス、エンゲルスの蔵書が約100年近くのあいだに辿った運命を考えるならば、これは驚くべき数字とってよいであろう。

しかし、未発見の書物の探索は、まだ終わったわけではない。たとえば、IISG 所蔵の「ラヴローフ＝ゴーツ文庫」の整理は完了していないし、パリ・トゥルゲーネフ図書館の蔵書の調査も終わっていない、等々。だから、マルクス、エンゲルスの蔵書のなかの再発見されたロシアの本の数は、今後の探索によってさらに増加する可能性がある、とってよいであろう。

なお、『ロシアの本』には、第3部として、ML 研 (M) がオリジナルまたはフォトコピーの形で所蔵している、ロシアの本からの抜粋や摘要を含むマルクス、エンゲルスの抜粋帳の目録が含まれており、本書の利用価値をいっそう高めていることを最後に付記しておこう。(1980年7月20日)